NORITAKA TATEHANA

TABI COLLECTOR

NAME: Noritaka Tatehana LOCATION: Tokyo, Japan
Nº OF TABIS: 67 COLLECTING SINCE: 2012



Noritaka Tatehana is an artist based in Tokyo.

Tatehana is an artist who leads a studio working with traditional craft techniques; he creates around the idea of “Re-think” — looking again, reconsidering, and rebuilding Japanese culture and memory.

His pieces are held in the collections of the Metropolitan Museum of Art and the Victoria and Albert Museum, among others. Tatehana is also a Tabi collector, though most pairs, he says, were gathered as reference material for his own work.

At the root of Tatehana’s practice is a single magazine: an issue of Ryuko Tsushin featuring Martin Margiela, borrowed from a friend in high school, when Tatehana wanted to become a fashion designer.

Encountering Margiela’s ideas eventually led Tatehana toward making shoes himself. How does Tatehana see the Tabi and Maison Margiela? We asked him about its form, the reinterpretation of culture, and his own philosophy of making.

舘鼻則孝は日本の文化や記憶を「Rethink」、すなわち見直し、再考し、再構築する——という基本的考え方のもとに作品を発表するアーティストだ。その作品は、メトロポリタン美術館やヴィクトリア&アルバート博物館などにも収蔵されている。「タビ」のコレクターとしても知られる舘鼻だが、その多くは自ら履くためではなく、制作の資料として集めたものだという。

舘鼻の活動の原点にある一冊の雑誌。ファッションデザイナーを志していた高校時代、友人から借りた『流行通信』のマルタン・マルジェラ特集である。誌面のインタビューを通してマルタン・マルジェラの思想やもの物作りへの姿勢に触れたことが、やがて舘鼻自身を靴の制作へと向かわせた。

靴の作り手として、コレクターとして、そしてマルタンが切り拓いた「不思議な靴」の系譜に連なる作家として、舘鼻則孝は「タビ」とメゾン マルジェラをどのように見ているのか。その造形から文化の再解釈、物作りの思想までを聞いた。





MAISON MARGIELA Do you remember your first encounter with the Tabi? What drew you to it?

NORITAKA TATEHANA I work as an artist now, but back in high school I wanted to be a fashion designer. When I was attending a prep school for art school entrance exams, a friend lent me an issue of Ryuko Tsushin, a Japanese fashion magazine, with a special feature on Martin Margiela. It included an interview in a Q&A format, and I was hooked by the house's philosophy and way of thinking about making things.
From then on, the Tabi became an icon for me. Encountering the Tabi was also what led me to focus on making shoes. I had only read about him in the magazine, but I found myself relating to his perspective as a maker.

MAISON MARGIELA How do you see the Tabi as a piece of design?

NORITAKA TATEHANA What strikes me is that it was inspired by the Japanese tabi, but it doesn't look exactly like the original. The design has been stripped back to something very minimal, while something so familiar to us in Japan has been interpreted and edited in a new way. The result reflects the designer's creativity, and I think that is what makes the Tabi truly unique.
Martin Margiela isn't Japanese, so he wasn't interpreting Japanese culture from a native perspective. But there is a clear respect for the original, and the parts of the Tabi that should not be changed are still there. I imagine those were the elements that interested him. The result has a distinct artistic vision that those of us who grew up with Tabi as something familiar could never have created ourselves.

MAISON MARGIELA How do you see the form of the Tabi from a maker's perspective?

NORITAKA TATEHANA The split toe and fastenings are key features of the tabi, while the round, cylindrical heel gives it a very modern look. Traditional Japanese tabi don't have leather soles, so using leather for both the sole and the upper might seem unusual. But it all comes together, including the way the sole is attached. I think it's beautifully made.
From a shoemaker's point of view, combining a dressy, substantial sole with a flexible upper is not easy. They are quite different qualities, but the Tabi brings them together very well. I'm always impressed by that.

MAISON MARGIELA What does "collecting" mean to you?

NORITAKA TATEHANA I see the Tabi as a sculptural object. Unlike a shirt or a jacket, shoes also have a collectible quality that makes you want to keep and study them. I do wear Maison Margiela Tabi, but I collect them even more as reference material, and most of the pairs I own are women's styles.
For me, collecting them is also a way of giving something back to the field that shaped me, in the hope that they might inspire the next generation of artists. In a store, you naturally see them as products, so I would love to have a place in Japan where they could be viewed and appreciated as works in their own right. To me, they are more than something you buy to wear; they have cultural value.

MAISON MARGIELA 「タビ」との最初の出会いを覚えていますか?

NORITAKA TATEHANA 現在はアーティストとして活動していますが、高校生の頃はファッションデザイナーを目指していました。美大受験の予備校に通っていた頃、友人が『流行通信』のマルタン・マルジェラ特集を貸してくれたんです。その号にはQ&A形式のインタビューが載っていて、マルタンの哲学的な思想や物作りへの考えを知ってとりこになりました。そこから憧れの存在に変わっていき、マルジェラの「タビ」が自分の中でアイコンになっていったんです。自分が靴をメインで作るようになったのも「タビ」に出会ったからでした。誌面を通した出会いではありましたが、作り手の目線に立って共感する部分があったんです。

MAISON MARGIELA 日本の伝統的な履き物を新たに再解釈した「タビ」のクリエイションをどのようにとらえていますか?

NORITAKA TATEHANA 足袋という日本の履き物にインスピレーションを得ているけれども、まったく同じものには見えないことが印象的です。ミニマルに削ぎ落とされながら、僕たち日本人にとって身近な足袋に独自の解釈や編集が加えられ、クリエイティビティを映す鏡として成立している。そこに唯一無二である本当の理由があると思うんです。
マルタン・マルジェラは日本人ではないので、日本文化をネイティブ的に解釈しているわけではない。でもそこにはリスペクトがあって、足袋の変えてはいけない部分がしっかり残っている。それが彼から見た面白い部分だったんだろうと想像します。身近に足袋があるわれわれでは絶対に生み出すことができない作家性が表れたクリエイションです。

MAISON MARGIELA 「タビ」の造形は作り手の目にはどのように映りますか。

NORITAKA TATEHANA 割れたつま先や留め具の部分は足袋そのもののDNAでありつつ、丸い円柱状のヒールをつけることで、とてもモダンな見え方になっていますよね。日本の足袋には本来革底がないので、レザーのソールとレザーのアッパーで足袋を表現するのは本来なら違和感があるはずなのに、ソールのつけ方や作りも含めてすごくうまく収まっていて素晴らしいと思います。ドレッシーなソールの厚みとフレキシブルなアッパーを同時に備えるというのは、靴の作り手からすると、両立させるのが難しい相反する要素なんです。それがとてもよくできているといつも感心しています。

MAISON MARGIELA 舘鼻さんにとって、「コレクションする」とはどういうことですか。

NORITAKA TATEHANA 「タビ」を彫刻のようなオブジェクトとしてとらえていています。靴には、シャツやジャケットなどのアイテムとは異なる、手元に置いてじっくりと観察したくなるような、コレクションするにふさわしい魅力があると思っています。僕にとっては実際に履くこと以上に資料として集めているという意識が強く、そのほとんどがウィメンズのモデルです。次の世代のアーティストがこのコレクションから何か着想を得てくれたらという願いもあり、集めることは自分を育ててくれた分野への恩返しでもあります。
店頭では自然に商品として見てしまうので、「タビ」そのものを作品として鑑賞できる場所が日本に生まれたらいいと考えています。

MAISON MARGIELA 日本の伝統文化や自然を再解釈して作品を生み出すアーティストとして、舘鼻さんの制作の方法論はどこにありますか。

NORITAKA TATEHANA 作家としてものを生み出す立場にいるので、身近な文化を意識的に俯瞰して見るようにしています。身近にあるものは当たり前すぎて魅力を感じにくい——それをいかに俯瞰した目線でとらえられるかが重要です。僕自身には花魁の高下駄を再解釈したヒールレスシューズがアイコンとしてありますが、作家として「Rethink」という言葉を使い、見直し、再考し、再構築することを創作活動の基本的な考え方として提示しています。ひらめきで作ることは実はなくて、自分の頭の中で時間軸を行き来しながら、必要なときに取り出せる引き出しを持ち続けることがとても大切です。マルタンのインタビューを読んだときも、いくつもの回答から一貫した考えが読み取れました。軸がブレないということは整理された引き出しを持っているということで、そこに憧れを抱きました。それが舘鼻則孝という作家のスタイルやイメージを構築する手助けにもなっています。

MAISON MARGIELA 普段愛用されている「タビ」についても聞かせてください。

NORITAKA TATEHANA 学生の頃から「タビ」を履きたいと思っていたので、メンズの「タビ」が登場して以来、履き続けています。それ以前はウィメンズのコーナーに靴を眺めに行くのも相応のハードルがありましたが、境界線が薄まり、マルジェラを買う頻度が高くなるターニングポイントになりました。いちばんよく履くのはブーツシュで、同じものを何足もローテーションして履いています。修理は基本的にメゾン マルジェラに依頼しますが、自分で直すこともあります。靴作りの知識を生かし、革に合わせたクリームで丁寧に手入れしています。

MAISON MARGIELA 舘鼻さんにとって、メゾン マルジェラとはどんな存在でしょうか。

NORITAKA TATEHANA 今では当たり前すぎてあまり語られないかもしれませんが、匿名性というテーマは、一見すると誰にでもまねできそうですが、実際には簡単に成立するものではありません。匿名性をあえて際立たせることで視覚言語にもなりつつ、見せたくない部分は見せない。すべてが一本の筋で貫かれているように感じたことが、とても印象的でした。メゾン マルジェラは自分にとっては常に新しい価値観を提示してくれるブランドであり、自分もそうありたいと鼓舞してくれる存在です。アイテムを身につけたり「タビ」を履いたりすることで、人前に出る勇気をもらえたりする。自分の作品もそうあったらいいと思いますし、作品を手にした方からそうした言葉をいただくことほど、うれしいことはありません。メゾン マルジェラも多くの人にとってそういうブランドだと思います。

「次の世代のアーティストがこのコレクションから何か着想を得てくれたらという願いもあり、集めることは自分を育ててくれた分野への恩返しでもあります」

